

救急時対応マニュアル

株式会社彩海

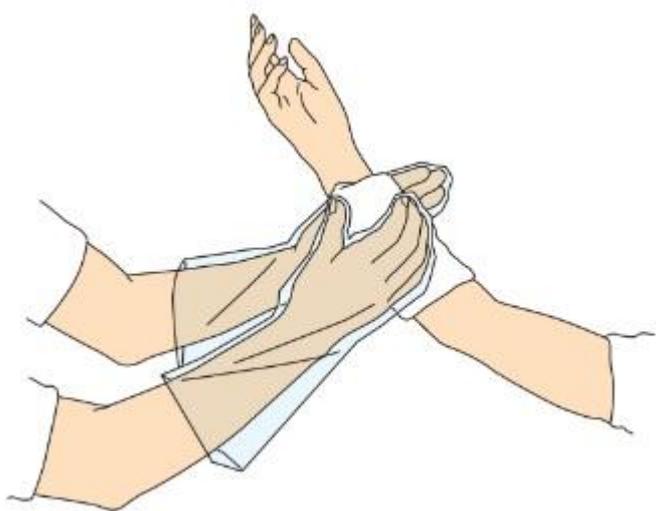
多量の出血－止血法－

大人の体には約 4～5L(体重のおよそ 8%)の血液があり、出血によって 1L 以上の血液が失われると生命に危険が及びます。

体が小さい子どもなどでは、それ以下でも危険です。

きずからの大出血は直ちに止血をしなければなりません。止血の方法には、①直接圧迫止血法 ②止血帯止血法 があります。

直接圧迫止血法



出血しているきず口をガーゼやハンカチなどで直接強く押さえて、しばらく圧迫することで止血を行います。この方法が最も基本的な止血法であり、多くの出血は、この方法で止血できます。

まず直接圧迫止血法を行い、さらに医師の診療を受けるようにします。

※止血するとき、救助者はできる限りビニール手袋やビニール袋を使用し、感染予防に努めます。

止血帯止血法

出血が激しい場合など、直接圧迫止血法でも効果がない場合に、出血している上肢または下肢に対して帯状のもの(止血帯)を使用して止血する方法です。

この方法は、神経などを痛める危険性がありますので、安全かつ適切に実施できるよう、手当について十分習熟しておく必要があります。

鼻出血



鼻出血の大部分は、鼻の入口に近い鼻中隔粘膜の細い血管が、外傷(ひっかくことやぶつかることなど)や血圧、気圧の変化などで腫れて出血します。

手当

- 座って軽く下を向き、鼻を強くつまみます。これで大部分は止まります。
- 額から鼻の部分をやや冷やし、ネクタイなどはゆるめ、静かに座らせておきます。
- ガーゼを切って軽く鼻孔に詰め、鼻を強くつまみます。
- 出血が止まっても、すぐに鼻をかんではいけません。
- このような手当で止まらない場合は、もっと深い部分からの出血を考えて、医師の診療を受けさせます
- ※鼻出血の場合、頭を後ろにそらせると、温かい血液が喉に回り、苦しくなったり、飲み込んで気分を悪くすることがあるので、上を向かせないようにします。
- ※頭を打って鼻出血のある場合は、止めようとむやみに時間をかけるのではなく、手当とあわせて直ちに 119 番通報します。

参考資料: 日本赤十字社 多量の出血/講習の内容について <https://www.jrc.or.jp/study/safety/bleed/>

★乳児の場合

救助者は、自分の手で乳児のあごを支え、前腕にのせて頭の方を下げ、もう一方の手の手掌基部で背中の中をたたきます。



☑️ ②上腹部を圧迫する

立っているか座っている場合

傷病者を後ろから抱くような形で、上腹部（へそより少し上）に握りこぶしを当て、もう一方の手でその握りこぶしを上から握り、瞬間的に手前上方に突き上げます。



この方法は小児の場合も同じですが、乳児や妊婦には行いません。なお、行った場合は内臓を損傷している可能性があるため、窒息の状態がおさまっても必ず医師の診療を受けさせましょう。

☑️ 胸部を圧迫する

★乳児の場合

乳児を仰向けにし、頭を下げ、後頭部と首（頸部）を支え、指2本で胸の真ん中（胸骨の下半分）を数回強く圧迫します。



これらの方法を行っている間に傷病者が反応（意識）を失ったときは、直ちに心肺蘇生（特に胸骨圧迫）を行います。

気道異物の除去

のどに異物が詰まると、話しかけても返答ができないとか、のどをつかむような仕草をして、苦しい状態を示そうとします。傷病者が咳をすることが可能であれば、咳が最も効果的です。声が出ないか、十分に強い咳ができない場合は119番通報をしたうえで以下の手当を①②の順に試みます。



①背中をたたく

立っているか座っている場合

傷病者の頭をできるだけ低くし、胸を一方の手で支え、他方の手で左右肩甲骨の間を続けてたたきます。



寝ている場合

傷病者を横向きにし、胸と上腹部を救助者の大腿部で支え、左右肩甲骨の間を続けてたたきます。



小児・乳児の場合

基本的には成人の場合と同じ要領で行いますが、いずれも力を加減して行うことが大切です。

★小児の場合

素早く抱きかかえるか又は大腿部で支え、頭を低くして平手(手掌基部)で背中をたたきます。

